



技術士だより・九州

公益社団法人 日本技術士会九州本部 冬季号<第94号>(平成25年1月15日発行)



観光丸(復元)全景



甲板上の参加者



三重津海軍所跡発掘状況(佐賀市川副町)



幕末時の三重津海軍所絵図

幕末佐賀の海軍力を探る

幕末に佐賀藩が預かっていた観光丸(復元)で長崎港をクルージングした。佐賀・長崎から230人の参加があり幕末期の志士達の操船を体験した。一方、佐賀では幕末期の洋式船艦の修理・造船や海軍兵士の養成を行った三重津海軍所跡の発掘が最盛期を迎えている。観光丸も幕末期には当地で運用され、日本海軍の礎になった。現在、三重津は「九州・山口の近代化産業遺産群」としての世界遺産登録に向け調査解明中である。

原田彰(建設・佐賀)

目次

巻頭言	1	技術情報	11
私の提言	2	私のチャレンジ	12
地域だより	3	中央・統括本部情勢	13
声の広場	5	九州本部近況	14
熟練技術士の声	7	会員ニュース	18
女性技術士の声	8	九州・沖縄産業技術	
修習技術者の声	9	オープンデー出展報告	19
協賛会員の声	10	九州各地区の技術士(会)の活動状況	20
研究会報告	10	協賛会員	23

新年のご挨拶

九州本部長 か い 甲斐 ただよし 忠義
(建設・福岡)



新年をお健やかに迎えのこととお慶び申し上げます。昨年は九州本部運営活動にご協力を賜り有難うございました。昨年の事業報告と本年度の主な取り組みを述べさせていただきます。

12月15日の理事会において、大分県、鹿児島県支部設立の承認がされました。7月に正式に発足します。従来の地区という名称が不明瞭で理解されにくい面があったと思いますが公益社団法人日本技術士会の県組織としての位置付けが明確になります。任意団体である県技術士会とは、連携協力体制を維持しつつ活動を行ってまいります。地区会員の30%以上の賛成があれば県支部設立が出来る規定があります。残る4県支部についても当該地区会員の意見を聞きながら速やかに県支部設立を進めたいと思います。

10月20日に第32回地域産学官と技術士との合同セミナーを大分市で開催しました。近年希にみる大盛況のうちに開催出来ました。テーマは、南海地震による東九州の津波対策でした。沿岸地方自治体の緊急避難対策報告は緊迫感のある内容でした。これを機に、地方自治体との災害時ボランティア支援協定の締結や住民向けに科学技術コミュニケーターとして平素の防災啓発活動等で活躍できる技術士の育成と活動の場を確保するための具体的な取り組みを検討したいと思います。本年度10月には、第33回地域産学官と技術士との合同セミナーを、北九州支部（北九州地区を名称変更）においてグリーンビジネスをテーマに開催予定です。

4月から九州本部の事務局体制を変更します。会員である事務局長、事務局次長と雇用する職員を1名とした体制とします。技術士試験の受験者の減少に歯止めがかからず特別会計の減収を一般会計で補填する事態となった事及び会員の伸びが大きく見込めなくなっている事が理由ですが、会計システムが整備され事務効率が良くなった為可能と考えています。本年10月第40回技術士全国大会が北海道本部担当により札幌市で開催されます。次回開催を担当する九州大会の概要を発表します。従来どちらかといえばお祭りのような取り組みでしたが、開催の目的は、技術士制度の普及・啓発です。この目的達成を念頭に準備に当たってまいります。

2月から理事選挙、本部と今回設立承認のあった県支部役員の地域役員選挙が行われます。同時選挙は、初めての試みです。地域役員定数は、九州本部が26名、大分・鹿児島県支部が12名となっています。立候補受け付けは、理事選挙が2月12日、地域役員選挙が2月1日からです。投票締め切りは、3月28日です。開票は、翌日の3月29日(金)です。投票用紙は、3月14日統括本部から郵送されてきます。詳しくは、日本技術士会のホームページをご覧ください。役員活動に情熱を持っている正会員の立候補を期待しています。

本年も役員一同頑張ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

地方における技術士の知名度向上への提言

長崎県技術士会会長 やまぐち かずと 山口 和登
(応用理学・長崎)



私たち技術士が活動を行う場合に常に挙げられる問題が知名度の低さである。特に都会ではそれなりの知名度はあるかもしれないが、地方における知名度の低さは特にひどい。例えば、同じくそれなりに難関といわれている国家資格の弁護士、公認会計士、税理士や同じ技術系の建築士などと比べれば一目瞭然である。特に一般の人には技術士と技能士の区別が解らないようである。「知っている人は知っている」との自己満足では何ら知名度の向上には結びつかない。このため、特に地方においては知名度の向上に努めることが、技術士の地位向上や付加価値の増大などに結びつくものと思われる。さしあたり、一般の人まで広く知名度を高める必要性は無いにしても、少なくとも技術系や理科系の人や知識人といわれる人ぐらいには知名度を高めたいものである。

このため手段の一つとして日本技術士会、地方の技術士会、職場等の技術士会などに属し、組織だって活動することも当然あげられる。また、技術士会以外の組織と連携して活動することもその一つである。私は地方においてもそれなりに技術系や理科系の人、そして知識人といわれる人が多くいる大学を利用することが近道であると思っている。私自身も大学卒業間近まで技術士というものを知らなかった。大学（理学部）を卒業間近になり、大学の恩師から「大学に残るなら博士を、実業界に進むなら技術士を」と言われたのをはっきりと記憶しており、その後の技術士資格取得のきっかけとなったことは明確である。技術士資格の取得者を多くすることが、またその志望者を多くすることが知名度の底辺を広くすることに繋がり、ひいては知名度の向上に結びつくものと信じている。

具体的には、長崎においては長崎大学主催の「長崎地盤研究会」の後援団体として長崎県技術士会が、そして私自身が研究会の副会長（会長は長崎大学大

学院工学科研究科蔣宇静教授）を務めており、行事や年6回の勉強会などに参画し、学生や院生との交流も盛んにし、知名度の向上に努めている。長崎地盤研究会については別の機会に紹介する予定である。また、最近技術講演会、講習会、技術フェアなどの催し等の後援依頼や講師派遣の依頼が長崎県技術士会に寄せられる事が多くなった。具体的には平成24年11月27日に長崎県建設技術研究センターで開催された(社)長崎県測量設計業協会の技術講習会の後援を行い、2名の講師を派遣した。その内の一人、長崎県技術士会の理事でもある清水正明技術士には「技術士試験の薦めと平成25年度制度改正のポイント」というテーマで70分の講演を行ってもらった。後援や講師依頼が多くなった要因の一つは長崎県技術士会の会員数が平成24年10月現在で145名、関連団体で県内在住の農業土木の技術士、技術士補で組織している長崎県農業土木技術士会が80名（技術士30名、技術士補50名）、長崎地区の三菱関連の会社に勤務する技術士及びOB技術士で組織する三菱技術士会が34名、技術士資格の取得等のため研鑽を目的とした技術士、修習技術者、技術士補、大学教員などで構成される長崎技術士勉強会が30名という会員数も影響を及ぼしているものと思われる。何れにしても技術士の知名度を向上させるための手段のひとつとして、今後も内容等を審査のうえ積極的に依頼先の後援をし、講師派遣を行っていこうと思っている。

何年か前に当時の九州支部のスローガンとして「技術士よ、外にでよう」とありました。このスローガンの意味するところは「積極的に外に向って具体的に行動し、知名度を向上させ、よって技術士の地位向上や付加価値の増大を図ろう」と勝手に解釈し、倫理要綱を遵守して行動し、技術士として社会に貢献して行こうと思います。

地域だより

北九州

九州本部北九州地区 技術研鑽会(日明浄化セ ンター、ウォータープラザ との地域交流会)の報告

幹事 むらかみ えみこ
村上 恵美子
(環境)



北九州地区の技術士会は会員数120名、平素から活発な自己研鑽活動(CPD)を行っている。

今回(平成24年10月)地域交流会として、北九州市日明浄化センター及びウォータープラザの視察、技術講演会を実施した。

日明浄化センターは、北九州市にある5つの浄化センターの1つであり、北九州市の約4割の下水を処理している。水処理と合わせ、自然エネルギーの導入にも力を入れている。

ウォータープラザは、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の「省水型・環境調和型水循環プロジェクト」の一環として、国内企

業の参加による官民連携事業として設置された。今後、発展が著しく予想されるアジア地域等への水ビジネスの展開が期待される最先端の技術実証を行っている。

技術講演会では、「北九州市の下水道行政」について、北九州市上下水道局村田健司氏(上下水道・総監)より、下水道の変遷や目的、役割や、日本国内や海外での発展状況が紹介された。

また、「北九州市における生物処理の変遷」として、(財)北九州上下水道協会・寺師政廣氏(上下水道)より、排水処理技術として最も普及が進んでいる活性汚泥法の種類や、それぞれの課題について説明された。

今回は、海外展開を見据えた技術実証施設を興味深く視察するとともに、北九州市の下水道行政、生物処理の変遷について、大変興味深い講演が行われた。

地域交流会は、技術士としての研鑽のみならず、専門以外の分野や現場を学ぶことのできる絶好の機会として、年1回開催されている。工業都市として、多くの企業を有する北九州地域の特性を生かした研修会である。他地区からの参加も受け入れているため、多くの技術士、技術補の皆様の参加・交流を期待したい。

(e-mail:emiko_murakami01@city.kitakyushu.lg.jp)

宮 崎

セミナー報告

広報委員 ふじわら ひでし
藤原 秀志
(建設、総合技術監理)



宮崎地区において、11月10日に一般市民と技術者を対象に実施したセミナーについて報告します。

セミナーの目的：今後発生が予想される巨大地震などの自然災害への対応策について学び、危機管理意識を高めること。

(1) 宮崎県における自然災害と減災について

講師：宮崎県危機管理局 主幹 佐々木史郎氏
内容：日頃から防災対策を行うことが組織が生き残れるための危機管理である。また、自然災害による企業活動の影響を抑え、中断しても早期に再開することを目指す「事業継続計画(BCP)」が必要である。

(2) 巨大地震・大津波から命を守るために

講師：宮崎大学工学部 准教授 村上啓介氏
内容：事前復興計画の必要性：①災害が発生した

際を想定し、被害の最小化につながる都市計画やまちづくりが必要である、②発災後、限られた時間内に復興に関する意思決定や組織の立ち上げを急ぐ必要がある、③復興手順の明確化、復興に関わる基礎データを収集・確認などを事前に進めておく。

(3) 2011新燃岳噴火ーこれまでの経過と今後

講師：鹿児島大学理工学研究科准教授 井村隆介氏
内容：今回の噴火で周辺地域にもたらされた多量の軽石や火山灰は、噴火活動とは関係なしに降雨によって土石流を発生させるおそれがある。新燃岳の噴火活動は小康状態にあるが、今後とも注意深く見守っていく必要がある。

(4) 最近の気象災害と防災気象情報の活用について

講師：宮崎地方気象台 防災気象官 奥村一仁氏
内容：気象台の仕事の紹介：①防災気象情報の提供、②地震や津波の監視、③火山の監視。平成25年3月から津波警報が変わる。「巨大」という言葉を聞いたら大津波警報で、東日本大震災クラスの津波が来るとあって、直ちに高い場所に避難する必要がある。

(E-mail: fujiwara@kokudo-c.co.jp)

大 分

CPD報告 平成24年度大分県 技術士会現地見学会

幹事 ふじさわ たかし
藤澤 孝
(農業)



大分県技術士会では例年現地見学会を実施している。今回は大分県南部の産業と発展をテーマに、9月22日春分の日に実施した。参加者は各専門分野から19名の参加であった。

1 石灰採掘現場

津久見市を訪ねると、まず目に入るのが石灰石採掘の山である。誰もが気になるところであるが、間近に見ることはできない。今回は、大分鉱業㈱さんに無理にお願いし採掘現場を見学させてもらった。4社が競って採掘している鉱山だが、いずれも階段状に採掘するベンチカット方式で、大分鉱業分の鉱

山は、42ha年間240万トンの採掘量とのことであった。さすがに全体量は企業秘密とのことであった。鉱石は立抗に落とされ、鉱石の品質ごとに選別した後、用途別に出荷される。99%は船輸送となっていた。現場で動く機械はことごとく超大型で目を見張るばかりであった。

2 東九州高速自動車道建設現場

大分県は東九州高速自動車道の早期完成が悲願となっている。南進する建設現場を、九州整備局のご好意で見学することができた。現場は佐伯ICと蒲江ICの間に最長の野々河内トンネル(2819m)で、㈱熊谷組が施工者であった。ナトム工法で施工していた。

工事を止めての見学であったが、何よりも驚かされたのはその安全対策であった。機械通路と人のそれは完全に分離され、仮設の角にはクッション材が巻かれ、粉塵対策マスク、廃水処理、騒音対策など素晴らしかった。結果的に昼夜工事が可能となったとのことであった。

見学される会社にとっては、ご迷惑なことと思うが今後とも継続実施したい。

(Email fujisawa-takashi@oct-net.ne.jp)

熊 本

～表彰受賞工事の 事例発表会～

広報委員 いさみ ひてただ
勇 秀忠
(建設)



熊本県発注工事、国土交通省熊本河川国道事務所発注工事、川辺川ダム砂防事務所発注工事等における優良工事を受賞した地元建設業者の受注者による事例発表会を熊本県土木施工管理技士会と熊本県技術士会の共催により平成24年11月13日(火)に開催した。本事例発表会は一般社団法人・全国土木施工管理技士連合会のCPDS 7 ユニットを取得。

事例発表の前に熊本県土木部土木技術管理課課長補佐の宮崎公男氏による「熊本県優良工事等表彰制度の説明並びに評価ポイントの解説」があった。

表彰制度の目的は、他の模範となる特に優良な工事を施工したものの技術力を積極的に評価し表彰することにより、技術力及び意欲の更なる向上を図るとともに、当該施工者の社会的評価を高め、建設産業の振興に資することであるとの説明があった。特

に、工事成績採点の考査項目説明には参加者全員が真剣そのものであった。最後に、施工計画書の重要性和設計図書に対する照査には注視して取り組む必要性を強調された。

工事名は省略するが、会社名と受賞者を下記に示す。

①熊本県知事表彰、㈱九建 辻崎隆一氏②熊本河川国道事務所長表彰、㈱森工業 松岡誠一氏、㈱坂本建設 岩永英康氏③川辺川ダム砂防事務所長表彰、㈱藤永組 露池透氏の四氏がパワーポイントで工事の要点を解説され、注力(工夫)した点を分かりやすく説明された。

その後、熊本県技術士会の二氏から以下の演題についての講演があった。

①衝撃弾性波法(iTECS法)について～コンクリート構造物の非破壊強度試験法～㈱大進コンサルタント、勇秀忠氏

②平成24年九州北部豪雨災害調査報告～そのとき阿蘇では何が～田尻技術士事務所、田尻雅則氏

熊本県土木施工管理技士会副会長の山本祐司氏(技術士建設部門)の企画での開催であり、熊本県土木施工管理技士会会員の知見が深まった講習会であったと思われる。

(isami@daishin-c.co.jp)

声の広場

I

環境測定技術者としての 課題と今後の道標

おがわ しんいち
小川 真一

(環境、上下水道、総監・福岡)



1. はじめに

私は河川・湖沼・海域などの水質分析、また工場など発生源でのばい煙測定を行ってデータを報告する業務に携わる企業内技術士です。本誌の読者には建設事業関連の方が多いと思いますが、環境測定分析という職種と技術士の接点について、本寄稿を機会に自分なりに振り返ってみました。

2. 視点を変えて課題抽出

依頼された分析を決められた公定法で行うことが多い日常業務の中で、いったい「高等の専門的応用能力を必要とする」技術内容はどこにあるのだろう？私が技術士を志した際にまず悩んだ点はここでした。

先輩技術士から「分析上の苦労ひとつにでも問題点と解決策が潜むはず、考えながら日常業務するように」言われたアドバイスが私の出発点です。

視点を変えると漫然とした日常の測定分析業務が底の深い湖のように広がって見えてきました。例えば次のような課題があります。

- 1) 公定法でうまく分析データが出ない。
- 2) 調査目的や分析対象に対応した測定計画の提案やアドバイスを行う。
- 3) 新しい分析法により効率化・迅速化を図る。

どんな課題に対しても大目的として「精確なデータ」をクライアントに提供することが環境測定技術者としての使命です。

3. 現場に戻って問題点解決

環境測定分析の特徴は、①試料の由来とサンプリングが重要であり、②分析対象とする濃度範囲が広い、ことにあります。いろいろなサンプルがラボには搬入されます。生活雑排水で濁った河川水もあれば山間部の清流もあり、降雨後の濁水試料も

あり。工場排水、河川水、地下水では桁違いの分析データとなります。

種々のマトリックス成分が多いサンプルの場合、手順通りでは当然分析に失敗することもあります。そんな時のキーワードが「現場百篇」です。

- 1) 試料の「顔(状態)」を見る。
- 2) サンプリング状況を確認する。
- 3) 採取地点の現場に立ち戻る。

私個人としてはサンプリング現場経験が豊富なほど、強い環境測定技術者になると思っています。普段と違う河川状況、臭い、風向き、など短時間で可能な限り多くの情報を得る訓練、それが技術者の身体のエッセンスを太らせ、分析上の問題点解決の糸口に繋がるはずです。

4. 要素技術としての測定分析

製造業で使われることの多い「要素技術」という言葉は、環境測定分析の分野に対応しているような気がします。

例えばデータという一つの小さな情報がプラント設計の基礎になり河川環境維持の基礎となる。脚光を浴びることの少ない「縁の下の力持ち」的な技術分野ですが、地道ながらも国民生活の安全など公益に密接に繋がっています。

公害国会を機にスタートした環境測定分析の歴史も既に40年余り、時代の歩みや価値観の変化と同様、業務依頼形態もクライアントの種類も多様化してきました。環境測定技術者の対象とする「現場」も多様化していることになります。

他分野の技術を支える技術者として、①より一層の幅広い知識、②コミュニケーション能力、③最新の分析技術の応用、など資質向上が常に求められていると思います。

5. おわりに

私も社内では測定分析業務の統括管理的な立場に身を置く年齢になりました。それでも原点である「現場」の汗と臭いが大好きです。できるだけサンプリング現場や分析実務に立つように工夫しています。次世代への技術継承の役割の一つとして、課題設定と解決能力も伝承していきたいと考えています。

(roadmap2050@yahoo.co.jp)

Ⅱ

技術士としての 私の取り組み

ながとも いさお
長友 勲
(建設・大分)



1. はじめに

私が技術士を取得してから、もうすぐ4年が過ぎようとしています。この間、私は技術士として今何がしたいのか、将来どのような技術士になりたいのかを考えて行動して来ました。

技術士は、技術士となってから何を実行してきたのが重要だと考えます。そこで、私は「技術士として〇〇するべき」と考えるよりは、「技術士として〇〇したい」と考えるようにしています。〇〇するべきと考えると、どうしても息苦しくなりますが、〇〇したいと考えるならば積極的に実行に移すことができます。なぜなら、そこには私のニーズがあるからです。従って、「技術士としてしたい事」に出来る限りチャレンジするようにしています。

しかし、私の技術士としての活動は、まだ始まったばかりですので、ここでは、技術士としてのこれから取り組みについて述べていきます。

2. 所属企業の枠を超えた活動

私は、技術士取得後ただちに技術士会に入会しました。技術士会に入会し、そこでの活動を技術士取得後の大きなメリットとして捉えていたからです。それは、所属企業という枠を超えた活動を行うことによって見識と感性を広めたいという思いからでした。一定の枠組みの中では、やはり情報が限られてしまい、技術者として必要な判断能力を高めることは難しいと感じています。活動を通じて、企業や部門に捉われない交流させて頂き、大きな成果を得ています。現時点においては、諸先輩方になんとか顔を認知して頂けるようになり、技術士会での活動も少しずつお手伝いさせて頂けるようになりましたが、更なる貢献を行うことによって、メリットを享受していきたいと考えています。

また、私はTESPECにも入会させて頂きました。また、実業務への参加の機会は得られていませんが、

監査業務等を通じて技術士としての能力を高めることができるものと考えています。

3. 地域一体となった活動

私は、昨年に技術士を補完する資格として防災士を取得しました。これらの資格をもって地域防災に貢献していきたいと考えています。東日本大震災の教訓もあり各市町村において、「自助」「共助」「公助」の取り組みを一層進めているところですが、広く一般家庭にまで浸透しているとは言えません。また、少なくとも私の住む自治体では、直接的にこの地域防災に関わっている技術士はいません。このような状況において、技術士が活躍できる場があり、地域に貢献できる機会が待っているように思います。

同様に、地域のまちづくりにも積極的に参加していこうと考えています。私の住む自治体においては、自主的な建築士会のメンバーが主体となって、まちづくりへの取り組みを行っています。技術士として、安心・安全なまちづくりという視点から、少しでも貢献できるのではないかと考えています。

4. 技術士の課題解決能力を活かした取り組み

技術士は、組織における立場や課題解決能力を有するという特性から、組織を管理するという役割も求められます。いわゆるマネジャーの役割です。それでは、マネジャーの役割とは何でしょうか。それは、自らが受け持つシステムのパフォーマンスを絶えず改善し続けることであると考えます。そのためには、自らのシステムの飛躍的改善を追究するための計画を策定できる体系的なアプローチが必要です。具体的には、①中核問題の特定②実用的な解決策の構築③関係者を説得し変化を起こす④継続的改善を促進するプロセスの確立です。

技術士は、高度な技術応用能力の向上を目指しながら、システムの目標は何であるのか、パフォーマンスは改善されているか、改善されていないのであれば何が制約となっているのか、その技術や解決策は目的を達成しているのか、を常に考えて行動しなければならないと考えます。高度な技術応用能力に加え、マネジャーの要素を発揮することによって、技術士の活躍の幅がより一層広がるものと考えており、その具体的な取り組みを始めているところです。

(E-mail : nagatomo@tutumi.net)

地縁を通した技術士活動



ふじなが まさひろ
藤永 正弘（建設・佐賀）

1. はじめに

私は建設関連部門の技術士として、社会資本整備等の「いわゆる公」の施策の一翼を担い、一方で地域住民の一人としても社会資本整備の恩恵に与ってきました。

最近、自分が住居する地域の世話役を受け持ち、地域づくりにかかわる中、公共の施策と地域共同体の摺合せや、地域住民の合意形成を図るための専門技術の必要性を強く感じています。と同時に、ある意味行政の末端組織である（居住する）地域のまちづくりに積極的に技術士としてかかわる責務を感じてきました。

もともと、地域は、その地域の生い立ち、歴史や文化、自然や行政（為政者）が及ぼした影響などで現存します。

私は、その地に住んでまだ日が浅く、その地域が歴史的に保有する性質・性格を十分に修得していないので、それらを学びつつ専門技術を生かした地域づくりを行う必要を感じています。

2. 地域コミュニティ

地域コミュニティは歴史的に形成された「地域住民が生活している場所」（領土？）とその構成する住人の集団です。場所とはいっても、そこでは生産・消費などの経済活動、労働、教育、衛生・医療、遊び・スポーツ、芸能・祭に関わり合い、住民相互の交流が行われてきた、いわゆる「地域住民の共同体」です。

地域コミュニティは、地域内に居住する住民相互の情報（行政や共同体の広報）共有、地域住民相互の交流などから、住民相互の信頼関係が築かれています。信頼関係は、協力関係を生むが、競争や対立も内包しています。しかし、構成員の個別利益や共同利益を過度に侵害することはありません。この点では、「個人のリスクや過当競争は抑制」されていると考えられます。つまり、地域コミュニティには、構成員の住民の相互利益を維持する規範が存在し、合意形成の基本があるといえます。

合意形成は地域コミュニティの中で「人（世話役）」が共同体の「良好な交流」や「安全・安心のみんなの住みやすさ」など、相互信頼の地縁組織の中での志縁活動で成り立ってきたのではないかと思います。

基底にいわゆる「お互い様」「譲り合い」「許容できるおせっかい」の「思考」意識が存在してこそその組織であり、社会システムが限定された範囲で総合的に機能したものと解釈されます。

3. 地縁を通した技術士活動

しかしながら、今日の社会システムの変化は、住人と共同体へのかかわり方に変化が生じており、共同体集団への無関心、住民の交流や信頼関係が希薄あるいは無関心になった中では、運営組織は世話役個人として、志援活動として、「潜在していたリスクの顕在化」やこれまでと違った問題点が生じ、時には過度ななやみや行動などが伴うリスクを負うことになります。ここに一般の志縁活動とは加担意識が異なります。

地域づくりの基本は、自分が住んでいる「まち」をよく知り、伝えることによって、わが町に愛着と誇りを持った人々があふれ、「まち」に活気と輝きを再生または生み出し、住民が楽しく健やかに暮らすことにあります。このような状態を実現するためには、住民が自分たちの「まち」のこと（地勢、自然環境、歴史、文化が発するメッセージ）を学び、「まち」に愛着を持ち、未来に活かしていくことが必要です。

地域のまちづくり組織は、ある意味、日常・非日常の地域住民の安全安心生活やより良き生存そのものを目指す行政の末端組織です。この意味から、地域を育てるのも社会資本整備そのものであり、技術士も住民の一員として関わることになります。

地域はそのために自らが「企画力」「実行力」「運営力」などのソフト対策を持つと同時に、地域の連合体である地方自治体とも折り合い、ともに発展する「提案力」や「協働力」が必要だと思います。

技術士は自分の居住地域で自分の専門を生かした地域貢献が十分可能であり、その地域のリーダーの一員であって欲しいと思います。

ちなみに、私は河川改修や地域環境等、とくに地域防災に関して専門を生かした役割を担っています。それらが、「地域力」を高める大きな手段となるものと考えます。

(fujinaga@mocha.ocn.ne.jp)

これまでのこと、これからのこと

全国大会実行委員 きよさき 清崎 じゅん こ 淳子
(応用理学・博士(理学) 福岡)



‘女性技術士の声’へ投稿することになり、私が読者の皆様へお伝えできることは?と考えた時、自分のたどってきた道とこれから取り組みたいと思って温めていることを、素直に書いてみようと思い立ちました。これまで、いま、これから思いを馳せる、よい機会を得たと考えています。

私が技術士を取得したのは2006年(平成18年)、まだまだ若輩者です。奇しくも時を同じくして、博士(理学)の学位も取得しました。技術士の部門は応用理学(地質)ですが、専門とする項目は『地熱及び温泉並びに防災』。一方、研究テーマは『八丁原地熱帯の断裂系と酸性変質作用』。昨今の情勢から一躍注目を浴びつつある再生可能エネルギーの中の‘地熱エネルギー’ですが、技術士受験時は「今からこのテーマで大丈夫?」と投げかけられたのを覚えています。地熱の研究へ踏み込んだのは、業務として接し始めた時に取り扱う内容が広く、それまでの知識では理解が進まないと思ったからです。

理学部地学科で岩石・鉱物を研究し、初めの就職先は工学部、特に‘しらす災害’を扱う職場でした。まさに梅雨末期の豪雨で表層崩壊による災害が発生し、災害調査をはじめ、科研費の研究テーマとしても崩壊のメカニズムに関わることとなりました。硬い岩石から軟らかい土への対象の広がり、工学部・農学部・理学部のチームで取り組んだ災害調査・研究は、分野を越えた広い視野を持つきっかけになったと思っています。当時は境界領域に取り組むという視点がありましたが、さらに多岐にわたる分野の組み合わせで取り組む機会が増えていることを実感しています。今ではこれまでのいろいろなつながりが、いつのまにか貴重なバックグラウンドとして相乗効果をもたらしてくれている気がしています。

今、少人数の会社で‘エネルギーと環境と地域の共生をめざして’というキャッチフレーズのもと、地域の取り組みに関わらせていただいています。キーワードとして考えているのは‘災害につよい’と‘エ

ネルギーセキュリティにつよい’とそろっての‘まちづくり’です。小規模な温泉地域に入り込んでの取り組みですが、‘地域主導型’の会合を重ね、目指すのは‘自主的’に学び‘自立’した考えを持ち、取り組みを‘継続’していくことです。自分の住む地域のことをよく知って、資源や知恵を大切にしたい。これは、ライフスポット的な地域を増やしたいという目標を持った取り組みに繋がっています。

私がここまでいろいろなことを続けられたのは、ひとつに家族の支えがあったこと、それから素敵な出会いがたくさんあったことに尽きます。その積み重ねの上に、これからできることを重ねていくと、‘科学’・‘技術’を‘生きる’ことに‘活かしてもらう’ことではないか…という目標が見えてきました。‘生活者目線’を大切に、取り組みを続けたい…手段はこれから工夫していこうと思います。

これまで、あまり‘女性’だからと意識して動いたことがありません。多少不便であったりご面倒をかけることはあったかもしれませんが、どちらかというと優遇されているような場面が多かった気がします。学会等へ参加しても、分野が分野ですので女性が少なく、すぐに覚えていただけるようです。結婚・出産・育児に研究・仕事と欲張りですが、肝に銘じてきたのは「100+100の200ではない、50+50の100でしかない」ということ。今、自分の置かれている状態は?何がどれだけできる?そういった疑問と格闘しながら、日々進んできた気がします。時間はすべて平等です。環境が整っているからということがよい条件ではない気がしています。いろいろな制約の中で最大限の自分を活かす、小さな積み重ねが大切に思います。今は関わりのあるすべての方々への感謝の気持ちでいっぱいです。これから、どうやって活かしていったらいいのか、常に柔軟な視点を意識しつつ、いろいろと取り組んでみたいと思っています。

(jkiyosaki@enecomm.com)

修習技術者の声

I

技術士二次試験に向けて

なりまつ しょうご
成松 将吾
(建設・大分)



私は高専専攻科にてJABEE認定プログラムを修了し、修習技術者資格を得ました。その後大学院に進学し、現在は建設コンサルタント会社にて、主に河川構造物設計を担当しています。

新社会人として入社したとき、先輩社員の多数の方が技術士一次試験を合格して技術士補資格を取得しており、JABEE認定プログラム修了だけで、資格を取得することに抵抗をおぼえていました。そこで自分の力を試す意味で、技術士一次試験を受験することにしました。「JABEE認定校を卒業しているのだから一回で合格しないとね」と会社の先輩から言われ、意地でも合格しなければと決意したことを覚えています。結果無事合格でき安堵しました。

一次試験の勉強に入るまでに、入社してから半年の間が空きました。そのたった半年の間に、学生時

代にはあたりまえであった、「記述する」ということが難しくなっていました。会社内での業務はパソコン作業が主となり、手書きでの作業はほとんどなくなっていました。このこともあり、現在は技術士二次試験受験に備えて、記述試験に抵抗を感じないよう、毎年何かしら資格の勉強をするように心がけています。

二次試験に向けて、今の私に不足していると思われる知識と技術力の向上を目指し、積極的に講習会や研修に参加するようにしています。レベルの高い講習会の場合には、自分で調べても分からないことが多々あります。そういった時には職場の先輩技術者の方に聞くなどして、疑問を残さないようにしています。

実務経験を満たしましたので、来年度の二次試験受験を考えています。部門は一次試験と同じ建設部門を目指しています。会社の先輩方から、業務と資格の勉強を並行して行うのは難しいという話をよく聞きます。このため常日頃からの記述を含めた勉強をかかさないようにし、技術士資格の取得に向けて励んでいきたいと思っています。

(E-mail:s.narimatsu@qcon.co.jp)

II

資格取得を目指して

くぼ けんすけ
久保 謙介
(建設・熊本)



私は、現在建設コンサルタント会社に勤務しており、主にコンクリート構造物及び構造解析を専門分野として担当しております。

平成13年に技術士一次試験に合格してから早くも10年が経過し、受験要件を得てからは技術士二次試験にもチャレンジしております。

これまで、幾つかの資格試験に挑戦してきました。実務を通じての知識習得や過去の試験問題を確認する程度で合格することも可能でしたが、技術士二次試験だけは、これまでの資格のようにはいかないことを痛感しております。二次試験の勉強を始めたころは、コンクリートの劣化や品質といった内容について当時は直接設計業務には関係無いと思っておりましたが、近年の長寿命化計画や橋梁補修設計では必須となっており、試験勉強が今となっては大変助

かっていると感じております。

昨年、会社を移りまして多種多様な業務を経験していく中で、コンクリート構造物が主体でない業務でも、試験に何か役立つと思いながら仕事に取り組むようにしております。建物の事後補償等の調査においても、住宅基礎にクラックが発生した原因を追及し、それをいかに分かり易くオーナーさんに説明出来るかということで試験を想定しながら考えます。

今年度は、7月に九州地区で豪雨災害が発生したことで、例年以上に仕事が多く試験勉強の時間が確保することが難しくなっています。しかしながら、技術士の諸先輩方もこうした状況を乗り越えて資格取得してこられています。時間が無い中での勉強方法を見つけ、また、設計報告書を作成するにしても発注者（読み手）が理解し易い文章作成をこれまで以上に注意していきたいと考えております。

近年建設業界も大きく変化してきており、災害対策、アセットマネジメント、新エネルギー等の多角的な視野を持つ必要があります。今後は、今まで以上に努力を惜しまず、目標に向かって仕事や多くの経験を楽しみたいと考えています。

(E-mail:kubo@toa-c.co.jp)

社内での技術連携による業務運営の取り組み

日本建設技術(株) てらだ としのり
寺田 年典
(建設・佐賀)



当社は佐賀県唐津市に本社を置き、昭和28年さく井業者として創業し、地質調査や地すべり工事、法面保護工事を中心に事業展開を行い、コンサルタント業への拡大を図りながら社業の発展を目指してきました。近年はガラス廃材を再資源化した「ミラクルソル」を開発し、土木・建築・水産分野への販売拡大を図っています。ここでは、社内での技術連携による業務支援の取り組みについて紹介します。

法面工事や地すべり工事においては、様々な予期しない問題が生じます。例えば、ある工事の施工中に予期せぬ地盤変状と湧水が発生しましたが、現場代理人や主任技術者とコンサルタント事業部の担当者が現地調査を行い、原因や設計変更などを検討・提案すること

で大きな問題にいたることなく、工事を完成することができました。また、着工前の照査で発見された問題に対しても、現場とコンサルタント事業部が密にコミュニケーションを図り、設計変更提案をアドバイスすることにより、発注者の手を煩わすことなく工事を完成することができました。一方、設計委託業務においては、コンサルタント部門の技術者が現場条件や施工計画について建設事業部のアドバイスを取り入れながら設計・計画をすることにより、より質の高い成果を得ることができています。

今後とも、当社の特徴を最大限に活かしながら、受注業務の品質向上に向けて、技術陣が総力を挙げて取り組んでいきたいと思っています。

研究会報告

建設技術研究会の紹介

よしかわ ただし
吉川 正
(建設・福岡)

建設技術研究会(別名 チームカワサキ)は、毎月第4水曜日の午後2時から、2時間の予定で、技術士会・九州本部会議室をお借りして会合を開いています。建設系技術士がメンバーであり、建設をテーマにメンバーが気楽に発言して、意見交換する場となっています。

平成18年9月16日に第1回を開催していますから、丸6年を経過したことになります。当時は、公共工事が談合などの関係で世間から悪く思われていました。公共工事に関係する者として、汚名を挽回できないものかと考えたものです。公共工事に関係する情報、施策の把握することを主眼に考えました。

メンバーを紹介します。Kさん(旧設省出身、道路部門に造詣が深い)、Tさん(旧運輸相出身、その後建設コンサルタント会社、海外工事のエンジニアを経験している)、Kさん(ゼネコン出身、建築施工が専門)、Fさん(ゼネコン、建築構造が得意)、Sさん(橋梁会社出身、PC技術に詳しい)、K(舗装会社出身、施工技術が得意)、Oさん(舗装会社出身、施工技術が得意)、Yさん(マリコン出身、港湾工事に従事)、年齢は64

歳から81歳までかなり高齢者集団となっています。

会合では誰かが持ち寄った新聞や雑誌などの記事(テーマ)を参加者全員にコピーして配付します。筆者が司会を務め、テーマを持ってきたものが簡単に説明します。そのあとはブレイクストーミングとなります。出身母体の違い、そこでの考え方の違い、その後の勉強の違いなどなどで、実に面白く、有意義な展開となります。その展開に参加者本人が感動することさえあります。議事録は筆者が記録して、後日参加者にメールで配信します。

チームカワサキは今後もこれまで同様に、気楽に参加できる勉強会を続けてゆきたいと考えています。しかし、新たな参加者が増えないことが悩みの種です。平日の午後で開催であることから、勤務をしているものには参加ができません。夜に開催するのは、毎日が日曜日の現メンバーには億劫です。こんな会合ですが、興味と時間のある方の参加をお待ちします。

(t-yoshikawa@gijutu.com)

最新の表面処理技術: コールドスプレー技術について

さかた かずのり
坂田 一則

(金属、総合技術監理・北九州)



1. はじめに

技術士だより（第76号：平成20年7月発行）に「溶射技術の変遷と今後の動向」を投稿して、約4年が経過した。前報では、溶射技術が1909年頃にスイスのM.U.SCHOOP博士によって発明され、1919年に日本に技術導入されて以来、約90年強が経過し、現在では、表面処理技術の一技術として、産業界に広く利用されていることを紹介し、溶射技術の変遷と現在の動向や近い将来に向けた研究開発状況を解説した。その中で、コールドスプレー技術は2000年頃には、欧米で研究開発が行われ、材料粉体を融かさずに、高速で基材に衝突させ、粒子や基材を塑性変形させて成膜する新しい技術としてウォームスプレー法やエアロゾルデポジション法と共に研究が盛んになっていることを紹介した。

本報では、弊社において研究開発を進めているコールドスプレー技術を紹介する。

2. コールドスプレー技術とは

図1に示すように、スロート部と末広になった出口部を有する特殊ノズルに作動ガスを供給して生じる高速のガス流

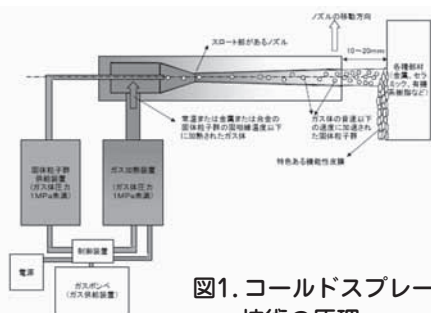


図1. コールドスプレー技術の原理

に被覆材料の固体粒子群を導入し、粒子を熔融させることなく、超音速ガス流と共に基材に衝突させて、皮膜を形成する技術である。その為、材料を熔融して噴射して基材表面に成膜する溶射方法とは異なり、熱による材料の特性変化を低減することが可能となり、皮膜の均一性（緻密性）や皮膜中の気孔の制御性等が向上する。また、塑性変形に起因する材料の強化等も期待できる。

3. コールドスプレー技術の最近の研究動向

2012年5月にヒューストン（テキサス州、USA）

で開催された国際溶射会議（ITSC2012）では、口頭発表された237件中、コールドスプレーセッションでは45件で、コールドスプレーを用いて、他のセッションに分類されている発表も含めると全体の20%強がコールドスプレー関係であった。

また、同年11月につくば市で実施されたアジア国際溶射会議（ATSC2012）においても、67件中16件（24%）がコールドスプレー関連で、ここ数年の傾向として、コールドスプレーに関連する研究発表が主流であることには変わりはないが、用途開発の報告例がまだまだ少なく、今後の大きな課題である。

4. 富士岐工産株式会社における研究事例

筆者は、ITSC2012において、東京大学の鈴木雄二教授らと共著の「Development of Nano-Porous Alumina Catalyst Support by Anodic Oxidation of Thermally and Kinetically Sprayed Aluminum Coatings」と題した論文を口頭発表した。

21世紀において地球環境負荷を低減するために、炭化水素系燃料の改質、排ガス中の毒性ガス（COやNH₃）の除去や窒素酸化物（NOx）の減少および化学エネルギーの熱エネルギーへの効率的な変換を可能とする微細な触媒物質を担持させたマイクロリアクターの開発が求められている。そこで、本研究では、アルミニウム粒子をコールドスプレーして形成した皮膜を陽極酸化して、触媒担持体として有効なナノポーラスアルミナ層の作製条件とナノポアの大きさやポア間隔およびミクロ組織との関係を明らかにすることで最適な触媒担持層を開発することが目的である。

写真1に示すような触媒燃焼用のマイクロリアクター¹⁾は携帯用の燃料電池用の改質器やマイクロ熱光発電用の熱源としての活用が期待できる。

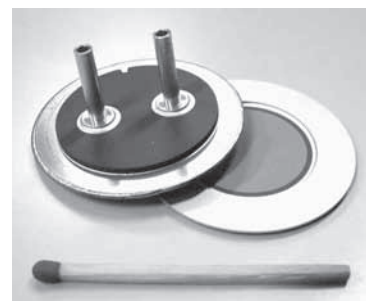


写真1. マイクロリアクターの例

5. 参考文献

- 1) T. Kamijo, Y. Suzuki, N. Kasagi, and T. Okamasa, High-Temperature Micro Combustor with Pd/Nano-Porous Al₂O₃, Proc. Comb. Inst., Vol. 32, Issue 2, pp. 3019-3026 (2009)

(sakata@fjk-kk.co.jp)

私のチャレンジ

出会いに感謝！

やまぐち あきみつ
山口 昭光
(農業・長崎)



人との出会いから30年来続けていること、最近のささやかな試みを紹介したい。

○毎年100冊の本を読む

私は昭和50年に県庁へ入庁した。配属された部署は企画部。数ヵ月後、先輩のお宅に泊まることになった。その時先輩が「毎日寝る前に1時間本を読んでいる」と話した。これには正直びっくりした。県庁とはこういうところが、県庁にはこういう人がいるのかと。少し真似をしてみようと思い、始めたのが毎年100冊の本を読むことである。

そして、一年間に読んだ本の中から10数冊を選び紹介する「ブックリスト」作成を30数年間続けている。昨年は100冊には届かなかったが、今年も図書館へ行き100冊の本を読みたいと思っている。人生には遊び心が必要だ。

○月一登山、日本百名山に登る

私が登山に興味を覚えたのは、学生時代に先輩から誘われ「伯耆富士」こと大山の夏山登山に参加したことがきっかけである。手元にある深田久弥の「日本百名山」は新潮文庫の昭和53年発行とあり、その頃百名山を意識したようだ。学生時代に槍・穂高連峰に登る機会を得たが、百名山といえど何回も登った大山だけであった。県庁に入り活動の場は九州・四国まで広がったが、この地域には9座（大山、剣山、石鎚山、九重山、祖母山、阿蘇山、霧島山、開聞岳、宮ノ浦岳）しかない。百名山登山は子供が中学生まで続けられたが、その後は時間を見つけては登る程度であった。百名山は九州の西の果てからは遠い山ばかりである。数えてみると夫婦二人の時、家族が増えた時と同じ山に登っているから数はあまり増えていない。50座以上残っている。数年前から再び夫婦二人の登山を始めた。月一登山と日本百名山

に、体力が続く限り登ろうと思っている。

○定年帰農を試みる

私が「定年帰農」と言う言葉に出合ったのは、平成10年に出版された農業雑誌「現代農業」増刊号の「定年帰農」であった。定年帰農とは、「農家出身者が定年退職後、都会暮らしをやめて故郷へUターンし、第二の人生として農業を始める」とある。私は農家出身で田舎に暮らしているので定年帰農には当たらないが、定年後農家と認めてもらうため、農業見習いとして畑の区画整理をきっかけにブルーベリーを植えた。土を酸性にすること、乾燥防止のチップを敷くこと、かん水など試行錯誤の連続で枯らすことも多かったが、6年経過した今100本程度が実をつけるようになった。生食、ジャム用と収穫している。何せ粒が小さいこと、作業は土日なのでまともな仕事にはならない。今はとなり近所に配り試食してもらっている。趣味の世界だが、評価が良ければ少しは販売したいと考えている。

○技術士を育成する

県庁に入庁した年に、自然保護関係の先輩から「10年後には技術士の資格を取得するように」と励まされたが、その当時はその資格のことは何も知らず、挑戦してみたいと思う程度であった。県庁生活の中で仕事がおもしろくやりがいがあり充実していたのでその資格のことはすっかり忘れてしまっていた。退職した先輩が平成10年に技術士の資格を取得した。その先輩が声をかけてくれたことをきっかけに数人が資格を取得した。所属の「職員人材育成計画」に技術士の資格取得を掲げたところ10数人が手を挙げたので、平成16年から先輩とともに技術士を育成する勉強会を始めている。その結果、毎年数人が資格を取得し、今年も筆記試験の合格者を出すことができた。今後も、微力ではあるが技術士を育成していきたいと考えている。

私の小さなライフワークだが、すばらしい先輩に出会えたことがきっかけである。出会いに感謝したい。

(E-mail : ak-yama@par.odn.ne.jp)

理事会報告

公益社団法人日本技術士会・理事 まつばら よしなお 松原 好直
(上下水道・北九州)



平成24年度第3回理事会は、9月19日に開催されました。今回は事前に配布された【Ⅰ】第2回（7月12日開催）理事会議事録の確認、【Ⅱ】審議事項：4件、【Ⅲ】報告事項：15件があり、その資料は九州本部にて閲覧可能です。主要な報告事項は次の通りです。

- (1) 委員会委員の異動について、次の委員が承認されました。(九州本部のみ抜粋・敬称略)
 - ・選挙管理委員会（委嘱）木許 卓郎（退任）伊藤 整一
- (2) 会員数（H24年7月末日現在）
 - ・正会員：14,350人 ・準会員：3,447人 ・賛助会員：160会員
- (3) 平成24年度技術士第二次試験筆記試験受験状況 () 内は前年の数値 受験率は%

技術部門	申込者数	受験者数	受験率	備考
01～20	27,982 (29,450)	21,195 (22,967)	75.7 (78.0)	機械～原子力・放射線
21	4,861 (4,826)	3,654 (3,719)	75.2 (77.1)	総合技術監理
計	32,843 (34,276)	24,849 (26,686)	75.7 (77.9)	

なお、同試験は8月4日～5日に終了しました。

- (4) 平成24年度技術士第一次試験申込数 () 内は前年の数値

技術部門	部門別計	福岡会場	備考
01～20	22,178 (22,745)	2,385 (2,461)	機械～原子力・放射線

なお、同試験は10月10日に終了しました。

*** 技術士試験の見直しについて（抜粋・案）**

『第21回科学技術学術審議会・技術士分科会』内に「制度検討特別委員会」が設置されました。その目的は多くの優秀な技術者の技術士資格の取得を促し、技術士制度の更なる普及・拡大を図るために見直しを行うもので、その主な見直し概要（案）を前月号でご報告しました。

6月27日に『第22回同・技術士分科会』が開催されました。当会・技術士第二次試験制度検討特別委員会は、次の検討と会員からのアンケートを募集中です。（当会のHP参照）

【第一次試験】（その狙いと改訂案……前月号参照）

【第二次試験】（その狙いと改訂案……前月号参照）

- ・技術部門・選択科目の見直し
技術士を取り巻く環境の変化に合わせ、選択科目を時代のニーズに合ったものに見直すと共に、極端に受験者数が少ない科目については、その在り方を検討する必要がある。これにより更なる資格活用につながることを期待される。今後の見直し、時代のニーズを踏まえ、産業界における技術士の活用状況並びに技術部門及び選択科目の将来性や技術の変遷に留意して実施するものとし、各技術部門の専門委員等から意見を聴取するなど技術士分科会において継続的に議論を行う。なお、見直しは、以下の考え方に基づくものとする
- 今後2年（平成25・26年度）程度の受験者の動向を見て、受験申込者数が20部門全体の申込者数の0.05%を下回る選択科目については、当該選択科目の廃止を含めその在り方を検討することとする。また、同様に0.1%を下回る選択科目については、他の選択科目との統廃合や内容の変更を検討することとする。
- 実施時期は、受験者への周知や準備の期間等を考慮し、平成25年度から実施の予定。
(おことわり)理事会の議事録は月刊誌“技術士”＝P E (IPEJ Journal)＝に詳細に記載されています。また、本部のホームページにも早い時期に公開されていますのでご参照ください。
現在は議事録の記載事項は省略し、支部や地区に直結した大事なところのみを抜粋して九州本部～各地区（県）単位に報告しています。詳細な説明が必要な場合は声を掛けてください。
(お願い)会合・行事予定（特にCPD）を、月刊PE (IPEJ Journal) に投稿してください。

九州本部近況

第32回地域産学官と 技術士との合同セミ ナー（大分）報告

九州本部

研修委員長 くぼ かわたかとし
久保川孝俊
(建設、総合技術監理部門)



平成24年10月20日(土) 9時40分～17時、大分市大分県労働福祉会館（7階ソレイユ）において、「地域産学官と技術士との合同セミナー」を開催した。参加者は官界21名、学界6名、産業界193名（技術士を含む）合計220名であった。

テーマは「産学官連携による東九州地震・津波災害の防災・減災と復興対策」で、特に大分・宮崎・鹿児島における被害予測や災害対策等、各県の事例発表やパネルディスカッションが実施された。

まず基調講演では、千田 昇大分大学名誉教授による「南海トラフに関連する地震・津波発生の可能性」と題して、東九州における地震予測について説明された。南海トラフは静岡県駿河湾から高知県足摺岬へと延びる長さ500km以上の海溝で、昨今では、南海トラフ沿いに起きている東海・東南海・南海地震が同時に起きる三連動地震の可能性も示唆されているが、これに日向灘地震を含めた四連動の地震となる可能性がある。また大分県における活断層は別府湾から西方に密に分布する正断層群が主で、別府湾の海底活断層も特徴的である。ここで佐伯市米水津間越・龍神池には津波堆積物が堆積しており、コアリングによる津波堆積物から、より大規模な地震は1000年程度の間隔を示すように推測され、宝永地震以降305年が経過しており次の地震が「最大クラスの地震・津波」であるか、もう少し規模の小さい地震であるかは、現在のデータでは予測できない。との講演内容であった。

事例発表では大分県佐伯市及び臼杵市、鹿児島県志布志市、宮崎県宮崎市の各防災担当者による各市の被害予測及び災害対策についての発表があり、それぞれの市町村の実情に即した被害予測と避難手法、防災対策方針等、詳細な計画が示され、津波避難所の再設定、標高表示、住民への情報伝達・啓発周知の再検討など同様な被害が予測される市町村にとっ

ても極めて有意な内容と考えられた。

次に、九州地方整備局企画部の火山防災分析官是沢毅氏により、南海トラフ巨大地震に係る検討スケジュール、津波防災地域づくりに関する法律、東日本大地震後の公共インフラが果たした役割や九州地方整備局の取り組みなどについての説明がなされた。

また大分県・宮崎県・鹿児島県各県の建設業協会の代表による災害時の取り組みとして、災害時協力体制の整備状況、緊急時作業の具体的内容、応急復旧活動事例などの報告が行われた。

セミナー後半では、九州本部の矢ヶ部 秀美防災委員長がコーディネーターとなり、学界、官界、技術士とのパネルディスカッションを行った。

千田教授は、予想される東九州震災時の地震・津波、高齢者施設の配置問題など学側も市民と一緒に調査・研究していく必要性を提案された。

井上康志宮崎県県土整備部次長は、数回に亘る東北被災地の視察体験や、宮崎県の海岸の減災対策の現状と課題、行政側から見た平常時及び緊急対応時に地域の技術士に望む事項等について言及された。

工藤宗治高専准教授は、大分都市地盤の液状化の危険性の検討、大分高専と地域技術士との減災対策への取り組み試案、地盤構造物の耐震設計の改善などについて報告された。

冷川久敏技術士は、リアス式海岸を持つ大分県太平洋側の津波対策の現状と課題について要約し、佐伯市宮浦地区における防災活動や、日頃から津波から逃れる個人独自の避難路を確保しておく必要性を、具体例を挙げて説明された。

西井康浩技術士は、津波に対する技術的ハード対策について、東日本大震災をシミュレートした実験を通じて得た知見を交えて説明された。

ディスカッションでは、行政と住民が一体となった公助・自助の育成についても議論がなされ、会場との質疑応答も熱心に行われ、以下の「大分宣言」でセミナーを終了した。

大分宣言：「公益社団法人日本技術士会九州本部のメンバーは、想定される地震・津波に備えて日頃から組織化を行い、市民の減災教育への支援やハード・ソフト面での減災対策への相談窓口の創設などを通じて積極的に社会貢献を行っていく」日本技術士会九州本部長 甲斐忠義

(e-mail : wctkc540@jcom.home.ne.jp)

技術士第一次試験報告

試験管理委員長 え さき ふみひろ
江崎 史啓
(建設・福岡)



平成24年度技術士第一次試験結果について報告及び私見を述べさせていただきます。第一次試験は10月8日(月)福岡工業大学において実施されました。申込者は2386名、受験率は79.7% (1902名)でした。本年度は、経費削減のため主任監督員(26名)以外は全国試験運営センター (NEXA)に委託することになりました。また、福岡工業大学を使用するのは4年目ですが、本年は学内全域が喫煙禁止となり受験者に禁煙を遵守するよう注意喚起して徹底させることに腐心しました。これは大学側から厳しい注文をつけられていたためでした。

一方、受験者側の状況については、例年受験票忘れが10件程度ですが本年は7件、受験票不着が4件発生しました。試験管理者側からすれば、受験する姿勢や態度が感じられず真剣さを疑うものである。

反面、記載内容ミス4件が発生。試験センター側の明らかな間違いであり、ミス発生の過程を検証しておかないと来年も同様の事象が起きるであろうと考える。その他、幾つかの部門において問題の訂正がありましたが、これも発生防止対策の困難さを露呈しているようです。

本年もまた、皆様のご協力のおかげで大過なく終えることができました。ただ、ここ数年技術士試験の環境が変化してきているようです。RCCM資格が技術士の指導の下ということが条件でしたが、この条件が廃止されて独立性をもつことになり、非常に優位な資格となりました。このことが技術士試験にも影響しているのではと考えます。つまり技術士の価値が相対低下していないかと。ここ2年間の一次試験合格率平均は、30%を下回っています。一次試験において合格率が上がらないと、当然のことながら二次試験の受験者数が増えません。しかし来年度から技術士試験において、試験内容が改正されるようです。これを良い機会ととらえて受験者が増え合格者が増えることを期待します。

青年技術士交流委員会報告

エネルギーについての勉強

うめだ かずひさ
梅田 和久
(建設・福岡)



青年技術士交流委員会では平成21年度より技術研鑽として日本におけるエネルギーについての勉強会を行ってきました。今回は3回目の実施として北九州並びに山口県に点在するエネルギー設備を見学する貴重な機会となりました。また昨年の東日本大震災による福島第一原子力発電所事故の発生は、その甚大な被害により我が国のエネルギー政策を転換させるほどのインパクトを持っていました。現在、衆議院が解散され総選挙前ですが政治家やマスコミからは連日、脱原発が叫ばれ選挙の争点ともなっています。そのような意味でもエネルギーを考える良い

機会となりました。

技術研鑽は10月27日に北九州市若松区に建設中のひびきLNG基地、白石国家石油備蓄基地展示館を見学し、午後には中国電力柳井発電所を見学。夕刻から片添ヶ浜温泉に入浴し周防大島町青少年旅行村で懇親会と宿泊となりました。翌28日は山口県宇部市の常盤公園にある石炭記念館で復元された採炭現場を見学。昼食後小野田市に移動し永山酒造とワイナリーを見学、最後は北九州水素タウン見学し全行程を終了しました。

現在、九州・山口の近代化産業遺産群は世界遺産の暫定リストに挙げられ、日本が近代化を成し遂げる中で取り組んだ鉄や石炭の生産の歴史が再評価されています。そして欧米から学んだ技術を我が物としていった歴史が脚光を浴びようとしています。見学した施設はこの近代化の延長にあり、現代の私たちの生活や事業を支えているものです。また原子力

の安全神話が崩壊しその結果、現在のエネルギー政策はこの明治以来の近代化に匹敵するような大転換点を迎えようとしていると思います。そして原子力には未来はないが代替されるエネルギーも見つから

ない状況です。明治以来、エネルギーこそ国家の課題である。そして近代化に取り組んだ私たち技術者の先輩たちの苦勞に思いを馳せる時、今回のエネルギー設備を巡る旅も学ぶことの多い旅でした。



ひびきLNG基地



永山酒造



石炭記念館



中国電力柳井発電所

環境部会研修会報告

環境部会会長 **あべ しずお** **阿部 静夫**
(総合技術監理、上下水道、建設・福岡)



環境部会の「自然エネルギーの創出について」の研修会の報告をいたします。24年9月13日、総勢39名の参加者が博多駅に集合し大型バスにて一路、鳥栖市及び糸島市を目指しました。

午前中は「鳥栖環境開発総合センター」で、30分間の事業説明を聞いたのち2班に分かれて、生ゴミや下水汚泥のメタン発酵によるバイオガス発電や間伐材の木質チップから水性ガス反応による水素ガス製造プラント設備などの施設の見学を行いました。当社は、ゴミなどの廃棄物の資源再生事業を先進的に進めており、総合的なリサイクルに取り組んでおられることを感じた次第です。

午後は、糸島市の白糸の滝に向かい、九州大学と糸島市が共同で研究されている「小水力発電」の実験施設の見学を行いました。(写真-1) 当地では、九大島谷研究室の渡辺氏から「小水力発電」を導入された経緯を、糸島市の職員であった時のころからの実情も踏まえ詳しく説明していただきました。計画では、第1段階から第3段階を予定されてお

り、まず観光用の水車を利用した小水力発電、第2段階としては年間を通して14万人の観光客が押し寄せる白糸の滝にある営業施設を含む地区をまかなう水力発電を計画、第3段階は白糸の滝がある集落全体の電気をまかなう予定で進められています。まず、今回見学を行った「水車による発電」技術ですが、大型水車の軸回転力を多段増幅してシャシーダイナモを約2000回転以上として発電するものがあります。ただ、回転速度の制限により100W~300Wの発電であるとのことでもあります。しかしながら、自然に存在するエネルギーを少しでも有効に活用することは、今後のエネルギー政策の上からも望ましい事業であることは間違いのないと思っております。

最後に、今回の研修会にたくさんの技術士の方に参加していただいたことは、とりもなおさず「自然にあるエネルギーの創出」に期待と展望を持たれていることにほかならないと感じました。なお、今回の研修会のお世話をいただいた環境部会の委員の皆様には厚く御礼申し上げます。



建設部会 現地見学会報告

建設部会長 ^{すぎもと}杉本 ^{せいじ}正二（建設、総合技術監理・福岡）

平成24年度の建設部会現地見学会は、福岡からやや遠いながら、本格的なコンクリートダムの撤去工事として全国的に話題になっている球磨川の荒瀬ダムと、延長4.8kmで九州最大の鍾乳洞と言われる球泉洞で実施しました。

日時は11月9日金曜日、博多駅筑紫口を8時45分に出発し17時10分に博多駅帰着する行程で実施しました。参加人数はバス利用者24人に熊本県在住で現場直行者3名を加えた合計27名でした。現地まで2時間以上かかるため、往路のバス車中において参加者の旧建設省河川畑OBの森勝義様をお願いし、ダムや河川計画等に関する話をさせていただきました。往路の時間を有意義に使いながらとても興味ある話を聞くことができたと思います。森様にはあらためましてこの紙面をお借りしお礼申し上げます。

現地では熊本県企業局の荒瀬ダム撤去準備室の方々にわざわざ熊本市から出向いていただいて丁寧な説明をしていただきました。見学は2班に分かれて11時から約1時間にわたって行われました。

ダム撤去にあたっては治水面・環境面への配慮はもちろん経済的・効率的な工法で行うことが求められています。そのため平成15年からダム対策委員会における検討を経たのちに平成22年からダム撤去技術研究委員会による技術の確認・検証を受けながら撤去計画が策定され、ようやく今年9月の工事着工に至っております。工事施工期間はダム撤去範囲及び環境に配慮した十分な期間を確保するため6年間（6段階）としています。撤去費用はダム本体が約14億円、その他護岸や道路かさ上げ費用などを加えて総事業費約88億円という説明がありました。なお熊本県企業局のHPには、ダム撤去に関す

る比較的詳しい資料等が公開されていますので興味ある方はご参照ください。

ダム本体は昭和29年に約3億円の費用をかけて築造されたとの説明がありましたが、その割にはコンクリートが新しく非常に頑丈に見えました。単純な見方をさせていただくなら、構造物としてはまだまだ十分に使えるのではないかと感じたのは私だけではなかったと思います。しかし様々な理由によりこれを壊すことが必要となり撤去方針が決定されいざそれを完了させるまでには、それを築造したときに匹敵、或いはそれ以上の多くの時間や費用や労力が必要になるということについて改めて考えさせられました。また、環境面の調査として、ダム下流の遙拝堰から上流の瀬戸石ダムまでの約20kmの間について、ダム撤去前、撤去中、撤去後の延べ10年間にわたる環境モニタリング調査を実施中とのこと、今後その検証・評価が注目されるところです。できるなら3年後くらいに再度見学してみたいと思いつつ荒瀬ダム見学を終えました。

昼食後はさらに球磨川上流へバスで約30分のところにある球泉洞を見学しました。こちらの方は約30分で見学を終え、併せてすぐ近くのエジソンミュージアムも見学したいと思っていましたが、施設が球磨川の増水による浸水被害を受けて閉館中のため見学できませんでした。このことは事前調査不足でやや残念でした。

今年度はさらに部会活動としてCPD講習会を実施できないかと模索中です。今後の部会委員会において協議しながらさらに活動を充実させるべく検討して参りたいと考えています。

(sgmts7501572@lep.bbq.jp)

現場見学会…… IN 桜島

副会長 ^{むらおか} 村岡 ^{きみのり} 公德
(建設・鹿児島)

最近の鹿児島の5Sは、「西郷さん」、「焼酎」、「桜島」に、「シラス」「新幹線」が加わって知られている。

年1回の行事としている青年部主催の現場見学会は、その5Sの一つ「桜島」をターゲットとして、去る11月17日に12名の会員を集めて開催された。

今年の桜島の噴火回数は、11月19日現在で1,022回を数え、最高の噴火回数を記録した昨年を追い越す勢いである。

見学会当日は、あいにくの雨模様ではあったが、桜島を紹介する施設である「桜島ビジターセンター」、「桜島国際火山砂防センター」にて、昨今の桜島の火山活動、砂防事業(ソフト・ハード対策)について、改めて桜島を取り巻く環境整備について学ぶことができた。

特に、朝からの雨の影響もあり、野尻川にて小規模な土石流を目の当たりにすることができたことは、ほとんど映像でしか見てなかった技術者にとっては、衝撃的で、非常に有意義なものになった。

現場見学会の終盤では雨もあがり、一般の人が入ることのできる最高地点の湯之平展望所に立ち寄り目の前に迫った桜島の荒々しい山肌、錦江湾、及び鹿児島市街地を見渡すことができた。

鹿児島県人は、桜島は身近な存在であるものの、意識して足を運んでまでゆっくり見学することはなかった。毎日の天気予報で今日の風向き(降灰)を気にする程度であった。しかし、今回の現場見学会を通して、改めて桜島の雄大さを実感できた次第である。

(Muraoka-tp@knk-g.com)



参加者の集合写真



小規模な土石流が発生

会員ニュース

☆(社)日本技術士会(九州支部)入会

〈平成24年6月〉

(所在地)(区分)	(氏名)	(部門)	(勤務先)
福岡	正会員 納富 信	機械	日鐵プラント設計株式会社 シュミレーションエンジニア リングソリューション部
長崎	正会員 川口 季昭	電気電子	協和機電工業株式会社電気システム本部エンジニアリング部門技術システムGr
佐賀	正会員 濱田 郁穂	電気電子	株式会社九電工研究開発センター電気技術グループ
福岡	正会員 加地 正人	建設	玉野総合コンサルタント株式会社福岡支店技術部
宮崎	正会員 田中 賢一	建設	玉野総合コンサルタント株式会社福岡支店技術部
福岡	正会員 辻 幸英	建設	パシフィックコンサルタンツ(株) 総合技術管理 九州支社交通基盤事業部道路室技術部
福岡	正会員 八谷 昌宏	建設	株式会社荒谷建設コンサルタント コンサルタント第一部
福岡	正会員 宮川 英也	建設	株式会社建設技術研究所九州支社ダム部
福岡	正会員 山口 直三	建設	玉野総合コンサルタント株式会社福岡支店技術部

長崎 正会員 川下 敏雄 上下水道:(有)長崎シビル設計技術部

福岡 準会員 八谷 昌宏 農業:株式会社荒谷建設コンサルタント
コンサルタント第一部

〈平成24年7月〉

(所在地)(区分)	(氏名)	(部門)	(勤務先)
福岡	正会員 松井 法彦	電気電子	電設コンサルタンツ株式会社 九州支店技術部
福岡	正会員 堀口 知徳	建設	(株)東亜コンサルタント技術部
佐賀	正会員 山口 甲	建設	山口事務所
福岡	正会員 吉田 勲	建設	株式会社建設技術研究所九州支社道路・交通部
福岡	正会員 今岡 浩司	衛生工学	株式会社九電工エネルギー事業部
福岡	正会員 撰田 克哉	応用理学	日本地研株式会社技術第二部
福岡	正会員 吉田 勲	総合技術管理	株式会社建設技術研究所道路・交通部
長崎	準会員 小林 雅浩	機械	三菱重工業株式会社原動機事業本部ボイラ統括技術部
福岡	準会員 撰田 克哉	建設	日本地研株式会社技術第二部
長崎	準会員 松尾 圭太	建設	株式会社第一検査工業構造物診断部

平成24年度 九州・沖縄産業技術 オープンデー出展報告

九州本部副本部長 ぬまじり 沼尻 けんじ 健次
ものづくり部会委員長 はっとり 服部 ひろまさ 弘政
同副委員長 いし い 石井 てるひさ 輝久

九州本部では、昨年に引き続き独立行政法人産業技術総合研究所九州センター（鳥栖市）で11月29日に開催された「九州・沖縄産業技術オープンデー」に九州本部ものづくり部会の協力で出展した。

本オープンデーは、一般参加者約300名、九州各県工業技術センター及び技術士会九州本部等から多くの展示スタッフ（技術士会九州本部3名）の参加により、盛況裡に終了した。



＜盛況の展示会場＞

当日、本技術士会九州本部の展示ブースへは、昨年度よりは縮小された展示会場で、開催が1日とはいえ22名のご来場があり、九州本部の事業状況や技術士の研究活動についての説明及び技術士会協賛企業によるパネル展示を行い、また配布資料では特に「技術士試験受験のすすめ」、「技術士を目指しましょう」等、技術士を目指す方へのパンフレットが関心と呼んだようであった。

1. 参加のいきさつ

昨年度は、九州経済産業局技術企画課課長山田様から、今後九州経済産業局の行事に公益社団法人日本技術士会九州本部には継続して参加していただきたいとのご要請があり、鳥栖市で開催される産業技術総合研究所九州センターの「九州・沖縄産業技術オープンデー」に出展することとなったが、今年は産業技術総合研究所九州センターから直接のご要請により参加することとなったものである。

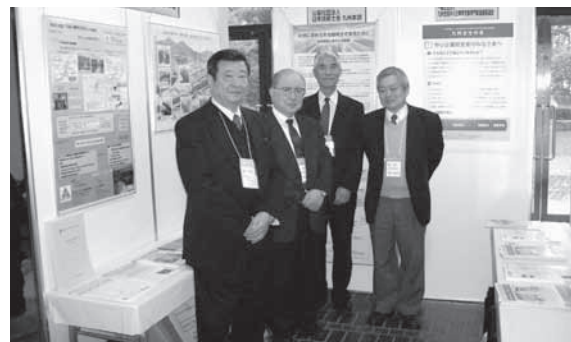
2. 大会テーマ及び参加テーマ

大会テーマ「つかもう技術！つくろうネットワー

ク！」に対し、日本技術士会九州本部は、「中小企業への技術指導・地方防災支援・地方自治体への技術支援に協力します！」との参加テーマを掲げ、日本技術士会の設立の意義の基に、技術士制度の普及・啓発を図ることを目的とし、技術士は21の技術部門にわたって、高度な専門的応用能力を必要とする事項の計画、設計、評価等を中心とした業務分野で活躍していること、及び昨今の社会の要請である地方防災支援に関する技術士会研究グループ及び協賛企業のパネル展示によるPRを行った。

3. 展示パネルと配布パンフレット

- ①日本技術士会統括本部「社会に求められる技術士であるために～日本技術士会からの提案～」
- ②九州本部「技術支援・協業による九州本部の活動」
- ③木材利用研究会（佐賀）「軟弱地盤への木材活用」
- ④㈱エスイー殿「護岸・岸壁補強アンカー工法」
- ⑤エネコム㈱殿「地域主導型つよいまちづくり」
- ⑥JFE商事テールワン㈱殿「補強土壁＝テールアルメ工法」
- ⑦日本サミコン㈱殿「ゼロハチフェンス」
- ⑧ヒロセ㈱殿「テールアルメ工法の耐震性・耐津波性能の東日本大震災で実証」
- ⑨ヤマウ㈱殿「安全安心の街づくり：アクアボンド等4工法の紹介」
- ⑩ライト工業㈱殿「災害に強い街づくり：ユニラップ工法等5工法の紹介」



＜甲斐本部長を迎えて＞

配布パンフレットは、昨年と同様、「公益社団法人日本技術士会の概要」、「日本技術士会会員の社会貢献」（以上統括本部）、「九州本部事業概要」、「技術士試験受験のすすめ」等の配布を行った。

今後もこのような展示会に出展する機会を捉えて、九州本部の活動状況を具体的にPRして行くことが必要不可欠と思われる。最後に、九州本部及び各県地区の技術士の皆様方からのご支援に心より感謝申し上げます。

九州各地区の技術士(会)の活動状況

九州の各地区では、九州本部の活動のほかに県庁や市役所内など技術士による様々な活動が行われています。これまで一堂に紹介されることはありませんでしたので、今回、わかっている範囲で情報をお寄せいただき、整理いたしました。このほかにもいろいろな活動があるかとは思いますが、今後、情報を収集し、充実していきたいと考えていますので、皆様のご協力をお願いいたします。

福岡地区

会の名称	所属会員の構成	主な活動内容	会員数
けんきゅう技術士会	九州地方整備局の現役又はOBで技術士及び技術士補の資格を有し、入会を希望する者	・総会（年１回） ・研修会（年１回） ・技術士資格取得の支援 ・他機関技術士会との意見交換会	約300人
福岡県庁技術士会	技術士資格をもつ県庁OBと現職員	毎年11月(30名内外) ・総会の開催（年１回） ・研修会または研究活動報告会の開催 ・意見交換会 通年 ・会員相互や技術士受験者に対する情報の提供等	現役53名 OB33名 合計 86名
福岡市役所 技術士会	福岡市役所の現役及びOBの技術士(技術士補は含まれていません)	・会報 年１回 ・技術士総会（年１回） ・講演会（年１回程度） ・施設見学会（年１回程度） ・海外視察（年１回程度）（水ビジネス～シンガポール、ホーチミン） ・福岡市役所技術士会「水プロジェクト」 ・福岡市役所への支援活動 ・「APCS（アジア太平洋都市サミット）通信」への記事投稿など	現役53名 OB31名 合計 84名
福岡シニア技術士ネットワーク (略称FSPE)	満年齢が50歳代以上の福岡地区および近郊に勤務または在住する技術士	・定例会 年間６回 原則として偶数月の下旬の木曜日午後６時半から九州本部会議室にて、内容は話題提供及び情報交換。 平成24年後半の提供話題 8月例会： のり面崩落対策に伴う道路改良設計について 10月例会： 小型風力発電と太陽光発電によるハイブリッド街灯の運用実績について 12月については、青年技術士交流委員会主催の公開講演会に参加することとしている。	約20名
NPO法人西日本建設技術ネット	技術士、１級建築士 他	1. 熟達技術者の活動域拡大 2. 建設技術の伝承 3. 若手技術者の育成 4. 有効新技術の普及 5. 他団体・組織との連携促進	15名
建設技術研究会	建設系技術士	毎月第４水曜日の午後２時から２時間の会合 公共工事に関係する情報、施策の把握 新聞や雑誌などの記事（テーマ）を参加者全員で勉強会	8名

北九州地区

会の名称	所属会員の構成	主な活動内容	会員数
北九州地区技術士会	北九州地区在住の技術士、技術士補	・総会、シンポジウム（年１回） ・技術研修会（月１回） ・企業訪問（年１回） ・幹事会（年３回）	120名
九州工業大学技術士会九州支部	九州工業大学の学生、OB、教職員	・総会（年１回） ・幹事会（年２回）	30名
日立金属技術士会	若松区の弊社事業所勤務の技術士	日立金属技術士総会への参加（年１回、会議出席もしくはテレビ会議での中継参加）	5名

佐賀地区

会の名称	所属会員の構成	主な活動内容	会員数
公益社団法人日本技術士会九州本部佐賀地区	公益社団法人日本技術士会登録（佐賀県）の技術士、技術士補	・技術士一次試験願書配布会 ・技術士二次試験願書配布会 ・CPD研修	50人
特定非営利活動法人技術交流フォーラム	・公益社団法人日本技術士会登録（佐賀県）の技術士、技術士補 ・公益社団法人日本技術士会登録の技術士、技術士補 ・理事会で承認した会員	・研修分科会—佐賀県県土づくりコンサルタ - ンツ協会月例研修会への講師派遣、PE道場 ・地域づくり部会—品質確保検討会運営、建設アドバイザー機構運営、技術基準書作成のための検討会運営、「佐賀の地質技術研修会」開催、木材利用研究会（佐賀）支援、 ・環境部会—縫ノ池交流、佐賀水ネット交流、千代田アサザ保存会支援、全国一斉水質調査への参加、生物多様性に関する活動支援、防災部会—河川合同巡視活動、佐賀平野大規模浸水危機管理対策検討会への参加、	104人

長崎地区

会の名称	所属会員の構成	主な活動内容	会員数
長崎県技術士会	県内在住の技術士、技術士補	・総会、研修会（年１回） ・役員会の定例開催（年６回） ・機関紙発行（年４回）・長崎大学との共同勉強会（年６回） ・関係団体、協会、学会等との協働	145名
長崎県農業土木技術士会	県内在住の農業土木技術士、技術士補	・総会（年１回） ・受験勉強会（３月～１２月、月１回及び随時） ・関係団体との協働	約80名（士30、補50）
長崎技術士勉強会	技術士、修習技術者、技術士補、大学教員、外	・勉強会〔年６回〕	約30名
三菱技術士会	・長崎地区の三菱重工業、三菱電機、三菱機工、各関連会社に勤務する技術士、及び、OB技術士 ・平成24年10月現在会員 34名	・話題提供・情報交換（年３～４回）	約34名

熊本地区

会の名称	所属会員の構成	主な活動内容	会員数
熊本県技術士会	県内在住の技術士、技術士補	・総会（年１回） ・役員会の定例開催（年６回） ・熊本大学、熊本高専とのエンジニア実践セミナー（年７回） ・熊本県立大との資格の勉強会（年１回） ・土木遺跡・施設バスツアー（年１回） ・関係団体との協同研修会（年４回）	78名
NPO熊本技術士の会	県内在住の技術士、技術士補	・総会 ・技術士勉強会（年５回） ・事業創出のための活動 ・関係団体との協同研修会（年４回）	64名
九州・沖縄農業土木技術士会熊本地区	県内在住の農業土木技術士、技術士補	・総会（年１回） ・関係団体との協働研修会（年２回）	40名

宮崎地区

会の名称	所属会員の構成	主な活動内容	会員数
日本技術士会九州本部宮崎地区	県内在住の技術士、技術士補	・総会（年１回） ・役員会（随時） ・研修会（年４回） ・関係団体、協会、学会等との協働	・正会員：69名 ・準会員：21名
NPO法人みやざき技術士の会	県内在住の技術士、技術士補	・総会（年１回） ・役員会（随時） ・研修会（年４回） ・関係団体、協会、学会等との協働	・正会員：82名 ・準会員：6名

鹿児島地区

会の名称	所属会員の構成	主な活動内容	会員数
鹿児島県技術士会	県内在住の技術士・技術士補	・総会、役員会（随時、年６回程度） ・研修会（年２回）現地研修会（年１回） ・CPD（年10回） ・鹿児島大学及び鹿児島高専への講師派遣 ・関係団体、協会等との連携	300名
NPO法人鹿児島技術士の会	県内在住の技術士・技術士補、活動に賛同する個人	・講演会事業（年２回+他団体との共催） ・技術士受験説明会、技術士養成講座 ・ホームページを設置して広報活動 ・環境部会、第四紀部会（月例会）	58名
鹿児島県農業土木技術士会	県内在住の農業部門の技術士	・講演会（年２回） ・会員相互の意見交換会（年２回） ・関係団体、協会との連携	57名
鹿児島県技術士会災害支援部会	県内在住の技術士・技術士補	・テーマ「鹿児島県の地震に伴う災害」研究 ・「原子力発電災害」「津波・風水害」「火山噴火」の３テーマで、グループで勉強会を開催 ・勉強会の成果は、CPDで発表する。	70名

協 賛 会 員

.....[福 岡].....	(株)唯設計事務所	[大 分].....
(株)エスケイエンジニアリング	[北九州].....	九建設(株)
(株)カミナガ	山九(株)	ダイエーコンサルタント(株)
(株)建設環境研究所九州支社	(株)太平設計	東洋測量設計(株)
(株)サンコンサル	(株)都市開発コンサルタント	西日本コンサルタント(株)
ジェイエシーエンジニアリング(株)	(株)松尾設計	(株)日建コンサルタント
九州支店	[佐 賀].....	日進コンサルタント(株)
新地研工業(株)	九州技術開発(株)	松本技術コンサルタント(株)
第一復建(株)	(株)九州構造設計	[宮 崎].....
大成ジオテック(株)	(株)コスモエンジニアリング	(株)アップス
大和コンサル(株)	新栄地研(株)	九州工営(株)
(株)高崎総合コンサルタント	(株)親和コンサルタント	(株)ケイディエム
東邦地下工機(株)	西日本総合コンサルタント(株)	(株)国土開発コンサルタント
西日本技術開発(株)	日本建設技術(株)	正栄技術コンサルタント(株)
西日本コントラクト(株)	[長 崎].....	(株)白浜測量設計
日鉄鉱コンサルタント(株)九州支店	扇精光(株)	南興測量設計(株)
日本工営(株)福岡支店	(株)実光測量設計	(株)西田技術開発コンサルタント
日本地研(株)	大栄開発(株)	(株)東九州コンサルタント
(株)福山コンサルタント	太洋技研(株)	南日本総合コンサルタント(株)
(株)富士ピーエス本店	西日本菱重興産(株)	(株)都城技建コンサルタント
富洋設計(株)九州支社	[熊 本].....	[鹿児島].....
平和測量設計(株)	(株)九州開発エンジニアリング	(株)久永コンサルタント

編 集 後 記

あけましておめでとうございます。新年を迎え、心機一転新たな目標を掲げ、スタートされているのではないのでしょうか。昨年は、オリンピックでの輝かしい活動、ノーベル賞受賞などなど記憶に新しい良いニュースが私たちの心を奮い立たせてくれました。

今年は、統括本部及び九州本部の役員改選の時期にあたり、新たな布陣のもとで様々な活動が期待されます。

「技術士だより・九州」ではミニ特集として、本号で「九州地区の技術士活動の紹介」を行いました。次号以降のミニ特集では「各地区のCPD運営紹介」「九

州本部会員の著書紹介」「健康秘話紹介」等の企画を予定しています。ご期待ください。(棚町)

発 行：公益社団法人 日本技術士会九州本部
〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街7-1
(シック博多駅前ビル203)

九州本部： ☎(092)432-4441
FAX(092)432-4443
E-mail:pekyushu@nifty.com

九州本部ホームページURL：
<http://www.pekyushu.com/>

印 刷：(株)川島弘文社